

月報 No.71

神戸山岳会

発行日 48.7.1

発行所

神戸市生田区中山手通
1丁目105-9 前田方

発行者 乾 昌弘



例集会スケジュール、6月、7月、8月

6/3	小豆島梅岳R.C.T	中突堤	立岡
6/10	保墨岩・石切場(確保練習)		野上③
6/17	雪彦山R.C.C	前夜現地集合	内藤②
6/24	不動岩R.C.C	国鉄宝塚駅 前夜20:00	釜本
7/1	妙号岩R.C.T～摩耶山	当日平野8:00	三浦
7/8	保墨岩R.C.T	阪急六甲北側 前夜20:00	植原
7/15	ボッカ 菊水～摩耶山	当日平野8:00	野上③
7/22	雪彦山R.C.T	前日現地集合	立岡
7/29	保墨岩R.C.T	装備点検 阪急六甲北側 前夜20:00	
8/5	不動岩・百丈岩R.C.T	国鉄宝塚駅 前夜20:00	古賀
6/13 7/11 8/8	集会	於 研修所(19:00)	内藤②
6/6 7/4 8/1	委員会	於 前田宅(19:00)	

目 次

夏山合宿

夏山合宿総感 (野上 哲男)	3
初めての山行 (三浦 靖男)	3

冬山合宿

杓子岳 (植原 清明)	5
雪山 (三浦 靖男)	7
冬山の感想 (古賀 英年)	8
冬山合宿反省 (内藤 正司)	9
装備係 (古賀 英年)	9
食糧係感想 (立岡 さちお)	10
食当後記 (三浦 靖男)	10
合宿蛇足録 (落坂 落太)	11

春山合宿

残雪期後立山縦走 (三浦 靖男)	12
------------------------	----

個人山行

上の廊下遡行記 (古賀 英年)	15
屏風岩前穂週辺の登攀 (立岡 さちお)	18
秋の穂高 (植原 清明)	20
新雪の南アルプス (茶臼岳一赤石岳) (野上(博)、堀野、岡村、三浦)	21
木曾駒ヶ岳 (立岡 さちお)	24
開田一野麦峠山行 (野上(博)、堀野、前田、萩本)	24

例会報告

保墨岩R.C.T (内藤 正司)	26
氷の山スキーツァー (内藤 久嗣)	26
貫井谷左俣遡行 (三浦 靖男)	27
比良山八幡谷 (萩本 維都子)	28
小豆島梅岳登攀 (三浦 靖男)	29
石切場・確保練習	30
氷ノ山から扇ノ山スキー縦走 (L益本、立岡)	31

隨 筆

ある遭難のこと (立岡 さちお)	33
48年度総会報告	36
会員動静、雑報	38
編集後記	39

夏山合宿雜感 昭和47年度

野上 哲男

長次郎雪渓の登りは長く辛いものであった。三の窓のコルに着いて、そこのゴミを見て幻滅しました残念であった。雨が連日降り、うんざりしていたが、翌朝、テントから顔を出すと雨は上がり、朝の陽光を浴びて紅く染ったチヌがそそり立ち、そして、空の青さ……あゝ美しい、この瞬間を僕は忘れない。ガスが去来するチヌ、その岩脣に触れ、力強く足跡を残してきた。夜、薄暗く眼下に富山平野が広がり、遠く暗い海に光る漁火が印象に残っている。山の中に居る時に忘れていた自分を見つけまた幸わせを感じる。自然を愛し、生を愛し、友情を信じ、そして山に行ける事を感謝し、心深まる山行を続けたいと思います。

初めての山行

三浦 靖男

昭和47年

8月5日

大阪発。

8月6日

寒い。夏というのにこの寒さは。初めて目にする3000mの山々、眩いばかりの残雪、これからどこへ連れて行かれるのか全然わからないまま、初日の行動が始まった。ただ先行者の足下ばかりを見つめて歩きとおして見たものの、自分の体力に疑問が生じて来る。無気力に、シュラフにもぐり込んでみても、明日への期待と不安で目は冴えるばかりである。

8月7日

夏というのに、雪を踏んだ嬉しさに童心に返った思いである。途中クマ騒動があり、重たいような軽いような足を動かしている。「アイゼン」、なるほど便利なものだ。雪上マラソン、尻セードは、ともに新鮮であったが、一旦停止が多くなって来た。唯一の楽しみは「食」にありと思いガンバル。帰途傷者一名を出したが、無事B.Cに戻れたと思いつや、サポートの声がかかる。重い足をひきずりながら行ったものの、収穫は15ミリぐらいのベーコンであったが、唯一の肉と思って供に喜こんだ。4名は行方不名のまま、先に「グースカ」と寝の人となる。

8月8日

体力の限界に、挑戦の日である。行けども行けども目的地一向に近くならず、目につくは他人

の足下ばかりなり。

8月9日

陰惨な地に入って行く感がする。雪の上にはあいかわらず新鮮である。入山初めてのロック・クライミングであるが、意に反して快適とはいえない。頂上からの遠望は、山に来たなあと思える程であった。下降後、全員、水を求めるあまり、クサイのに悩まされた。

8月10日

寝相が悪いのか、テントからはみ出しているうちに顔に冷たいものがあたる。早々に中に入つて寝直す。雨のため全員気力なく寝るだけであったが、他人に刺激されてチン・ジャンを攀じる。夕方サポート隊と一緒に新しく二名が現われる。全員がこの二名に期待している感じである。

(食糧だけ?)

8月11日

雨。全員テントにおいて食べるだけである。食う以外に能がないのかと思う。ひさしぶりに、アルコールが手に入ったので、全員天上の人となる。

8月12日

ひさしぶりの太陽。全員チンネ集中、途中ハプニングがあったにもかかわらず、無事頂上で顔を合わすことができた。例のごとく浮石には悩まされ、落石に肝を冷した次第であった。

8月13日

下山となるとさすがに、このゴミノ窓も、愛着のあるもので去りがたい感がする。剣よ、また来年も、と思いながら下界へいそいた。

合宿後記

高山、合宿、と言う初めての経験で、自然条件下における人間のあまりにも小さいことを感じながらも、なお執拗に生きようとする人間は、また大きいものである。

下界でいくら理論を言っても、自然の中における人間は小さい、しかし、人間自らが自然の中打ち解けて行くことにより、自然と人間の対話、自然と死の境界、危険を甘受した上の生の判断、すべてにおいて今、人間自ら生きているということを、また、これから先も生きようすることにほかならないと、感じるしたいである。

合宿までの例会、個人トレーニング、計画や買い出し、そして本番、全てにおいて僕にとって登山第一歩であった。(1972.9.7.記)

杓子岳

植原清明

12月31日小雪

細野(9:50) — 二股(10:45) — 猿倉山荘(13:35~14:00) — 幕営地(14:30)

8時10分小雪の舞う白馬駅に着いた。電車を降りれば寒気が夜行での睡気を払ってくれる。宇都宮からのKさんと落ち合い、待合室で朝食の弁当を開ける。

駅前よりバスで細野へ。バスの中はスキー客で満員、登山者は私達以外ほとんど見あたらない。周囲の山はガスって見えない。細野より二股へは雪の上に轍があり、二股より雪は次第に多くなるが、杉、唐松林の中に一条のトレールがついていたため勞なく歩ける。昼過ぎブナに囲まれた白馬山荘に着く。山荘には管理人が居り、登山者が5・6人休んでいた。ストーブが勢いよく燃えてる。冷えた体に熱いお茶がうまい。山荘より少し登った。両側が小さな尾根に挟まれた狭い沢状の所にテントを張る。山に囲まれているためか、NHK第2放送がはいらない。そのため天気図が書けず、天気予報に頼る。

1月1日快晴のち吹雪。

幕営地(3:50) — 引っ返し(5:00) — 杓子尾根取付(5:30) J.P.(11:40)
— 杓子山頂(12:45) — 小日向のコル(15:15) B.C.(16:10)

2時起床。外へ出れば満天の星空。風が無いためか、たいして寒さは感じない。当初の予定であった1810m峰へB.C.を上げるのを変更し、ラッシュをかけ、一挙に頂上をアタックすることになる。オーバズボン、オーバーシューズ、アイゼンを付け、3時50分出発。囲りの山々はまだ静かに眠っており、クラストした雪面にアイゼンが快ち良く響く。5時、忠実に進んできたトレールが白馬主稜に続いていることに気がつき引き返す。実際に私達は大雪渓を横切り、主稜取り付き近くまできていた。暗闇の中に白く見える尾根はスケールが全くつかめず、どこが杓子尾根かわからない。5時30分、杓子尾根取付きにつく。微かなトレールが残っているが、すぐなくなってしまい、膝までもぐり出した。5時45分輪かんをつける。ラッセルを交代しながら進むが、あまりはかどらない。6時50分Nさんが不調のため帰幕。東の空が赤みがかり、やがて朝焼けの中から太陽が出てきた。全く元日に相応しい御来光だ。7時20分1810m峰につく。前方には双子尾根と杓子尾根の接点であるジャンクションピークが見えるが、遠くに感じられたり、近くに感じられたりする。雪の斜面は次第に傾斜を増してゆき、ラッセルは苦しくなるが、誰にもけがされていない新雪をかき分けて行くのはバイオニアーのようで楽しい。時々双子尾根

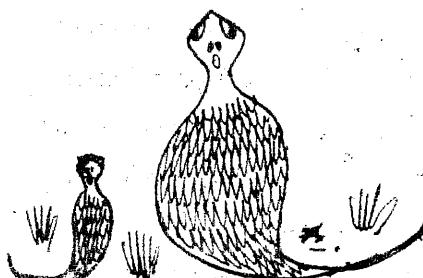
を越えて突風が吹いてくる。その度に雪面にピッケルを突きさし、飛ばされないようにする。右手には、たいてして突起していない尾根のような蓮草岳、大雪渓より白馬山頂へ突き上げている白馬主稜が近くに見える。10時30分、大雪渓を豪快に見おろせるナイフ・リッジに登る。輪かんをはずし、スリップせぬよう一歩一歩慎重に進む。ジャンクションピークには雪煙がしきりに吹き上っている。風は増え強まり頬がビリビリ痛い。10時45分ヤッケを着る。大雪渓側には雪鹿が張り出している。11時40分ジャンクションピークについた。雪に被われた八方尾根が小さく見える。空はいつの間にか一面雲に被われ、荒れそうな気配だ。ここから山頂まではもうすぐだ。登頂できる喜びがこみ上げてくる。正面に少ししか雪を付けていない雪壁が現れた。しかしステップが切ってあるので、難なく越えることができる。山頂直下の岩が露出している壁に、フィックス・ザイルがある。それにつかまって12時45分山頂についた。黒部を隔てて剣岳が見えるが、黒部から吹き上げてくる冷たい風に眼をあけることができず、ゆっくり見るわけにはいかない。12時50分早々と山頂を後にする。風雪の中を転げるよう双子尾根を下り、16時10分B.Cに辿りつく。

1月2日雪。

今日は停滞。雑談や歌を歌ったりしてテント内で過ごす。夕方除雪。

1月3日雪のち晴。

5時起床。テントを徹収し、7時30分出発。白馬山荘に余った食糧を渡し、ハイビッチで下る。9時40分二股につく。Kさんが血相を変えてとんでくるので何ごとかと思ったら、発電所の車が乗せて行ってやること。好意に甘えてトラックで白馬駅へ。背後には雄大な八方尾根が聳えていた。



雪 山

三浦 靖男

初めての冬山ということで、期待と不安が一緒になり複雑な気持だが、緊張した気持で白馬の駅に着いた。スキーヤーでごった返す中でバスを待つのにも端の方に追いやられた感がする。入山前の気持とは反対に以外に雪が少なく、たいした苦労もなく猿倉の小屋に着く、小屋でお茶を貰ってから10分ほど行った所にB・Cを置く。明日のため今夜は寝ようとするが、一度全員が横になるともう二度と体を動かせない状態で寝つく。

元旦。2時に起き、まずい雑煮を食べて4時出発する。ベースが杓子尾根の取付近くにあるので、取付を通り過ぎ大雪渓の中腹まで行き、道が違うことに気がつき元来た道をひきかえす。だいぶ時間を損したが、やっと尾根に取付く。初めのうちは少しトレースもあったが、すぐにそれも消え、雪も腰のあたりまでになり、さっそくワッパを履く。全体に少し明るくなって来た頃からもうラッセルにしごかれる。リーダーはいとも簡単に歩いて行くが、初めてのボクの方はなかなか前へ進まず、それにワッパを履いてはいるものの、靴が大きいのでワッパなどは靴のまわりに板切をあてたようで、もぐること甚だしく雪を殴りたくなる。それにひっきりなしに足をつりかけてたまたもんではない。

完全に日が昇り、春の陽気の中で急勾配の中でのラッセルが続く、途中で一本立てたとき振向くと、ハケ岳や富士山が見え、ごっついなあと感心する。急勾配を過ぎ、ナイフリッジの場所も案外簡単に通り過ぎ、もうアイゼンだけで進む。目の前のジャンクションピークはもうすぐだ。

ジャンクションピークについたときは、もうヘトヘトで強烈な睡魔に襲われ、5分ぐらい目をつぶると速さでハット目がさめる。すると出発の声がかかり、カステラを歩きながら食べているうち、口の中に唾液がなくなりカステラが喉を通らず急に吐氣がして来た。お茶を飲んでからまた歩き出すと、どうしても気分がわるくての方に残ってもらって、みんなには先に行つもらう。15~20分くらい休んで気分もよくなつたので、みんなに追いつき、昼過ぎ杓子岳のピークに達する。この頃はもう雪吹いていたので、ガスの切れ間に剣が見えた時は、ただうれしいの一言である。雪吹いていたのですぐ下山にかかるが、先行パーティーが先に行かず待ちぼうけである。途中で僕がスリップし他パーティーと、うちの会の中に突込み、かろうじて止まったが、他の人をアイゼンで怪我させてしまった。「慎重さが足りへん」と先輩に注意されながら、やっと双子尾根の取付あたりに来た。テントまではもうすぐである。

実動12時間のアルバイトで目的達成し、シュラフに潜り込んだ今は寝るだけである。

翌日は停滞ときめ、アルコールづけである。

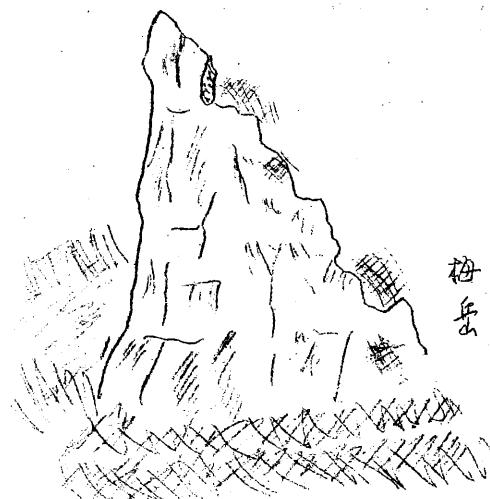
4日目二保まで下山し、二保から発電所のラッセル車で白馬の駅まで乗せてもらう。午前中に駅につく。ポンに行っている間に4人ももう帰ったあとであった。残りの5人で八方ヶ岳へ行き山が主体かスキーが主体かわからないくらいスキーにしごられる。やっと一つの課題をすまして帰阪の途につく。

雪が少なく天気もよかつたので、トントンと事が運び思つたほどの苦しさもなく、チームワークも良かったので、安心して参加できたことが一番印象強かった。また自分の登山行為についても未熟さがつくづく感じられた。

冬山の感想

古賀英年

「冬山」それは私にとって、まったく未知の世界だった。私は未知の世界への希望も大きかったが、又、高校時代に冬山に登っておきたいという「意味のありそうでない事」が、頭から離れなかつた。合宿前には、不注意にも、負傷をしてしまい、一時はあきらめの境地にあつたし、又、他の人からも、あきらめるように言われたりしたが、しかし冬山という魅力には勝てなかつた。私は、この冬山の為に、カッターシャツ1枚の生活を心掛けた。装備その他、地形、冬山気象のこととも、いろいろ勉強しました。今、思えば、冬山に登った事より、冬山という目的の為に山への知識と体力をより高めようと、努力したことの方が、はるかに価値があったように思われます。今回の合宿は、比較的天候に恵まれ、余り苦勞がなかつたので、多少ものたりない点も、ないではなかつたが、今回の冬山での経験を生かし、次の困難に立ち向っていく為に、より高度なトレーニングと、知識の向上に励もうと思う。



冬山合宿反省

内藤正司

思ったより早く計画を済ますことが出来た反面あっけなかった様だった。今回、私達の合宿は新人対象であったが、新人諸君は充分強かったと思う。私も初めての冬山のリーダーになり、いろいろと勉強になることがありました。未熟さを多いに反省しております。岸本さんや金田さんの適切なアドバイスがあった為、スムーズに計画が進行出来たことは大変感謝しております。ありがとうございました。全般的にみて、もっと本を読んで予備知識を頭に入れておかなければならない。そうすれば初歩的な動作や用具の使用法等は判っているはずだと思う。そして行動（作業）はもっと素早くしなければならない。あの程度の冬山は自然条件が良かったにすぎなく、もっと厳しいものと考えてください。トレーニングの時点でも皆よく頑張ってくれたので成功したと思う。チームワークもよくとれていた。これからはひとり、ひとりが、自分で計画して山に行くのだという心構えですべてやって欲しいと思います。

装 備 係

今回の合宿は、天候に恵まれスピーディーな山行となった為、装備で特に不足した物はなかったが、合宿後の反省会で二、三意見が出たのでそれについて考えてみる。

- まずテントの広さについてであるが、合宿参加者が9人であり、この人数に適したテントが無かった為に、すこし窮屈な思いをしたことはたしかである。しかし、テントの事は合宿の準備をする時から、テントを1つにするか2つにするかと迷ったが、結局重量の点から考え1つのテントで行くことにしたのである。又窮屈であったが、皆がまとまっていられたことを思うとこれで良かったのではないだろうか。これは、私の考えだが、今、KACには多人数用と小人数用の冬山用テントはあるが、その中間が無いので、次回テントを説明する時は、今回のことを見参考にすればどうだろうか。
- 次にスノースコップの事であるが、今回の合宿は豪雪に遇わなかつたので、それほどのラッセルもなしにすんだが、次回から、B.Cをおく様を登山の場合は、ピッケルにとりつける様なスコップと違い一本しっかりしたのを携行したほうが良いと思う。
- 最後に発泡スチロールの効果であるが、これは雪面からの水分を、完全にシャットアウトする為、すこぶる暖かい。すこしかさげるが、ザックにうまくつけられるので、なるべく携行すべきである。以上、この3点が特に気づいた。

(記 古賀)

冬山合宿・食糧係感想

立岡 さちお

今回はB、C設定の合宿形態上、質的向上を主に考慮して計画立案された。乾燥物、アルファ米等の使用を極力抑え、生米、新鮮野菜、生肉類をふんだんに使った。その結果、質的向上は見られたものの、軽量化や調理の手間などの難点がめだった。量的には普通一般の計算よりやゝ少、な目にして過不足はないようであった。いつものことながら、行動食では半分成功、半分失敗というところ、カステラは行動食として優れていたが量が少ないと苦情が出た。パンは質的に問題があり、実際食用されず、パッキングの材料ぐらいたるしらわれた感が深い。又、テント徹収の際、ゴミ焼き跡から行動食として配分されたはずの粟おこしとおぼしき燃えかすが多量に発見されたことにいたっては食糧係として複雑な心境であった。食糧計画の一環として、適確な調理方法（いわゆる味つけ）の研究が不充分であったと反省しております。

食 当 後 記

今回は行動日数が少なかったので食糧の占める割合は少なかったが、全体から見ると、大きな誤算があった。筆頭にあげることができるのは行動食の問題であった。レモンとハチミツは常に一体となるべきで、チクワも食べ易いものであった。これらはもっと使用回数を多くしてもよかったです。問題となったのはパンであるが、水分の不足する時には味が変質せず、喉を通り易いものということでパンに何かを付けて食べ易く、また味の良いものを考える必要があった。またビスケットなどのお菓子類をもっと利用しても良いように思われた。

朝食は量的に重たいのを除けば餅は良かった。ラーメンにしてもホンコンラーメンは安く、またペトペトにならなく最もよかったです。夕食はボリュームのあるものを使ったので問題はなかった。

全体的に見ると野菜の利用の使方、例えばあらかじめ刻んでパックして行き、鍋でもどすとジフィーズより良いのではないか。また味つけの調味量などは、その料理の必要量をもっと計算して持って行く必要があった。いつも同じ味では食欲もおこらない。金銭的に重量的には軽減できたが、味つけや水かけんなど、料理の腕は今一歩というところであった。主食は縦走形式なので米にしたが、アルファ米と半々にすればもっと軽減できたのではないか。入山前に料理して持って行けるようなものをもっと考え（例えばベニカンなど）、また各自の腕自慢料理を用意しておいて欲しと思います。

始めて食糧係を受け持ったので、全員の納得のいくようなものはあまり組むことが出来なかっ

たことをお詫びします。また普段からの各自の食糧に対する関心をもっと持ち、計画の時にどうし
どし発表してくれることを望みます。

(記 三 浦)

合宿蛇足録

その1

- 今回の合宿はなぞが多かった。恐い話がやたら多く、一夜明けてテントサイトを調べてみると、氷レモンの怪がテントの際まで忍び寄っていた。
- アタックでもあるまいに、夜が明けるのを待ちかねたようにテントのキンチャクを振りほどき、ガマン袋の緒を抑え、オーバーミトンをつっかけて飛び出す輩の行く先は……？
- 孔子、曰く、正月やモチで押し出す昨年の屁。
- 屁にも色あり、情あり、となりの坊や大きくなれと吹かしすぎてローソク消え。

その2

- 8人用テントに9人半。コンロ消しても950ワット、人の温もりを知る。
- KAC旧人曰く、うちのテントには端がない。(某新人の寝言より)
- KAC新人曰く、うちのテントには底がない。(KOBE ALCOOL CLUB同人)
- 雪のチラチラ降る晩に山ヤがトックリもって酒買ひに……。あゝあの後姿や、あの人は何しに山に行く人ぞ、今も昔もやること同じ、ここにアルコールニズムの原点を教えらる。

その3

- はやすぎた下山の余勢をかってスキー場に山屋が繰り出す。リフト係員曰く、<雪不足の折お帰りの際はよく雪を払ってお帰りください>。
- 細野スキー場にカマイタチ出現。靴下に切り口なけれど足に傷口あり、その姿、いまだ見たるもの無く、はやてのどとく現われ、風のように去る、怪にも不思議なスキー場に生息せし動物なり。

その4

- 世は山も下界もパンダばやり、猿倉台のB.Cではオヤダヌキ科パンダがばをきかせていた。
- 猿倉台のタンネンbaumでジャイアント、パンダを発見、さっそく今夜はパンダ鍋でパンダコンバ!(初夢は秘めて夢あり希望あり)

◎ パンダ三題

- 猫を食べてもパンダというのは、パンダが飲んでもキリンと言うがごとし。
- 中国産でもジャパンだと言うは、三宮にあってもチャイナタウンと言うがごとし。
- ビール飲んでもファンタ（パンダ）と言うはやけ酒飲んでもエビスと言うがごとし。

落坂 落太 記

残雪期後立山縦走

今回の春山合宿は、前半三人、後半三人で、全期間通しは一人だけという少しあのたりない合宿（いや、むしろ個人山行と言ってもよい。）でしたが、厳冬期後立山縦走を目的にした積雪期の後立山概念把握と、新人の残雪期雪上技術習得に大きな成果を得たと思う。

今回この縦走の最大のポイントは、後立山特有の強風であった。そのためには、装備の最小化・軽量化に伴い、強風に耐えうる体力が必要であった。

記録

4月29日（快晴）

前半：釜本（0L）、原、三浦

町の桜が落花した頃、満開の山桜を前に信濃森上駅を降り、雪どけ水で増水した姫川を横に見ながら白馬大池に、冬はスキー客で賑わう梅池スキー場に着く。ガラガラのリフトに揺られて8時45分梅ノ森に、もうここは雪の世界である。真青な空を頭に後立山縦走の第一歩を踏出す。スキーヤーと抜きつ抜かれつ成城大小屋を過ぎ、11時40分天狗原に着く。スキーヤーでごった返しているので早々に目の前に見える乗鞍の急斜面に取りつく、途中スキーヤーを横目で見ながら肩に着く。すごい風であまり休む気にもならず歩き出す、もうここは山ヤだけの世界である。12時40分乗鞍岳のピークを過ぎ大池のコルに来た時にすごい雷が鳴ったかと思うと、強い風と震が降り出し、あっという間に雪になった。やはり春の天気は変わりやすい。早々ここにテントを張ることにする。まだ1時過ぎ、雪は止んだが風はいっこうに弱まることもなく我々は明日に備える。

4月30日（快晴）

3時に起き5時30分に出発する。昨夜は強風のためほとんど寝ていない。一ピッチ目から目前の斜面を登る。天気は昨日と変わらず快晴であるが風は強い。小蓮華岳までの道は強風のため

雪は少なく、夏道があちこちに出てる。途中雷鳥に会い気を落ちつけるが例の特有の声で鳴いている。7時30分小蓮華岳を過ぎ三国境に向かう。風はますます強くなり、後立山で最も風の強い所で我々三人とも風に足をとられてあやうく飛ばされるところであった。ひとまずここで休み風の状態を見る。

一時間たっても風はいっこうに弱まる気配もない、しかたなしに慎重に歩き出す、身は60°ぐらいいに傾いたまま歩くので体力の消耗も激しい。10時に三国境に着く、ここで白馬岳主稜を登攀中のパーティーを見ながら白馬岳に向かう。途中の急斜面は上部スタカットを強いられるぐらいの登りで、背中の大キスがこたえる。11時10分白馬岳に着く。すばらしい大パノラマである。剣が手に取るように見える。夏、剣から見た後立山を今残雪の後立山から見返す。これほどの幸福感はない、今までの苦労を吹き飛ばしてくれるほどだ。あまり長くはいられないで写真を撮りそのまま杓子に向かう。

依然風は強く、特に大キスは抵抗が大きく体力の消耗も大きい。この冬杓子岳に立った時のことと思い出しながら、1時杓子岳直下をトラバースする。ほとんど夏道の状態で、部分的にスタカットを使いながらが岳に向かう。歩き始めから強風のため体力もほとんど使い果し、ただ命的につくだけである。

2時30分の頭を過ぎ、天狗の小屋も近い。疲れた身に鞭打って最後の強風と戦う。3時40分小屋につく、致着が遅かったため満員であり、仕方なしにゴミ捨場にテントを張り疲れた身を癒す。2日分の体力を消耗したためK君が体の異状を訴える。今はもう三人とも寝るだけで何も欲しくない。

5月1日（晴れ）

今日は後発隊と合流する唐松までなのでゆっくり起きる。だいぶ疲れもとれ、7時40分我々のパーティーが最後に小屋をする。天気もよく風もないのでのんびりと歩く。歩き始めすぐに雷鳥に会い、品のない声で挨拶される。8時5分天狗の頭に立ち、最初の難場である天狗の大下りに入る。雪は全然ない。しかも風がないので完全武装は暑くてしようがない。慎重に下りキレットに立ち、ここで衣替えをする。まったくの夏である。休憩の後、最大の難所不帰に向かう。

夏道の状態で一峯を越え、二峯に取り付く。ガレ状の悪い所を登り、途中クサリと鉄バシゴで登りきる。鳥帽子岩直下で順番待ちをして、ハイマツにビレイを取り雪庇をトラバースし岩に取り付く。5mほど登ると固定ザイルが目につき、それを利用して腕力で登りきり、リッジ状の稜線を通過しガレ状の夏道を行き途中鉄バシゴを利用して悪場を越える。夏道ぞいに頑張って11時50分不帰二峯の頭に出る。休憩の後、他パーティーが鳥のモモをかじっているのを横目で見な

がら通過し、夏道ぞいに約1時間唐松岳に致着。1時。唐松小屋まで降り、すぐそばにテントを張る。

5月2日（雪のち雨） 三浦（残留）

昨日までの天気とはうって変わって、小雪がちらついている。

不帰甲南ルンゼ登攀を諦らめ、K君とU君が八方尾根を降りる。一人残った私は除雪を行なう、そのうち雪が雨に変わり、雨の中を終始ブロック積みに励む。

頭上を前線が通過している。

5月3日（雨） 三浦（残留）

昨夜は強風雨のためほとんど寝ていない。朝起きてみると強風のためテントの張り綱が一ヵ所切れており、見わたすとまわりにいたほとんどのパーティーが小屋に逃げている。やはり“備えあれば憂いなし”、雨の中を一人黙々とブロック積みをし、テントを補強したのがよかったです。

後発隊のN君とU君が今日来る予定である。雨の中でまたブロック積みを行なう。

午後2時N君とU君が致着する。久し振りに友に会えてうれしくてたまらない。これほど人恋しかったのは初めてだ。二人のためにお茶を出し、早々に食事にする。

後半：内藤（正） C.I.、植原、三浦

5月4日（曇のち晴）

5時起きてみると雨は止んでいるが、強風で行動を少し見合わせる。7時、五竜アタックといふことに決めサブザックでテントを出る。ヤッケやオーバースポンが鎧のようにカチカチになるぐらい寒い。途中でアイゼンを外し大黒岳を慎重に下り、ほとんど夏道の状態で白岳を越え、8時45分に五竜小屋に着く。休憩の後五竜にアタック、途中でアイゼンを着け上部少しスタットを使いながら10時に五竜岳に着く。強風に苦しめられた小蓮華、白馬岳あたりを見ながらよくここまで来たものと感心しながら360°のパノラマを堪能し、下山にかかる。

テントに帰る途中、天気もだいぶ良くなって來たので今日動ける所まで動こうと言うことになり、12時にテントにもどり、1時30分テントを撤収してまた今朝と同じ道を歩く。ひさしぶりに大キスが背にこたえる。3時40分五竜の小屋に着き、速見尾根を降りることにして白岳の南斜面を慎重にトラバースし、大遠見の手前でテントを張る。

後立山特有の強風から解放されたテント場は、満天の星空を頭に五竜、鹿島、カクネ里を正面に、大町の町のあかりを見ながら、この山行最後の夜を飾るにふさわしいふん囲気である。今宵は遅くまで話に花がさく。

5月5日（快晴）

6時に起きてみると快晴の春山である。

8時にテントを撤収して、苦労した山々を後にする。もう足は軽く、大遠見を越え、何度も何度も鹿島槍・カクネ里を振り返りながらまたいつの日か会えることを胸に、小遠見の分岐を過ぎどんどん降りて行く。途中でクリセードや雪上訓練をし、出発しようとすると下からN君の兄さんとM君に会う。五竜岳アタックとのこと。二ともだいぶバテギミだったが、二人の成功を祈りながら分かれる。

法大スキー小屋を通り最終の神城スキー場につく、もうここは俗界である。リフトに揺られながら今までのことを回想しながらリフトを降り、さわやかな高原を後に今回の合宿も無事終了。遠くには白き峯々が強い春の日ざしにさんさんと輝いていた。

(記:三浦)

上の廊下遡行記

古賀ひでとし

8月1日火曜日 天候(晴)

有峰口AM7:00着、9:30折立峠に着く。腹ごしらえして出発だ!すぐ太郎の登りにかかる。景色を見ながらピッチをかせぐ、坂道は急でないがなんと長いのだろう、三角点をすぎお花畠で大休止、北には有峰湖、東に剣岳、西に外国を思ふ樹林帯、南には、これから登る太郎の稜線と澄みきった空。青く澄みきった空が私の心をなごませる、小さな花を見て思いにふける、写真をとりこの草のもとで寝そべる、「ここにずっと居たい」そんな気持ちをおして、太郎平の登りにつく。(太郎平着 PM1時15分)

ゆっくり歩いたわりには早く着いた。体調良行。アルバイトした後のビールは最高! 昼食をとり満足した気分で薬師沢への下りにかかる。川が下っている。川と薬師岳の作りだすコントラストが美しい。歩く、歩く、歩く。しだいに地下足袋での歩行が苦しくなる。苦しくても歩く。今、私にあたえられたことは歩くことだけだ。薬師沢合宿に着く、足がいたくてたまらない。だがここはもう黒部川だ。よく歩いた。満足である。フライもはった、夕食もとった、あとは寝ることのみ、川の音を聞きながら夢の世界へ……。

8月2日水曜日 天候(晴のち雨)

昨夜は大変さむく、4、5回目がさめた。明け方4時頃、あまりのさむさにたまらず、シュラフカバーに入る。目がさめると6時半、朝食をとる。今日は金作谷までとピッヂをあげる。徒渉がつづく。夏だというのに筋肉がかたまりそりに水はつめたい。ややもすると、激流に押しなが

されそうになるのをかろうじてくいとめる。PANTUはもちろん、お腹までビショヌレである。サムイ、なんというサムサなのだ！川原で昼食（ソウメン）をとる。昨日と同様に食欲はバツグンに有る。このころから、いやな雲が空を濁しだす。「雨だけはふってくれるな」、だがそんな望みは、空しくたたれた。雷光とともに激しい雨。岩棚に身をかくす。1時間たった。太陽はまだ顔を出してくれない。昨日、太郎の登りではあんなに私達をむかえてくれたのに。小雨になるのを見はからって岩棚を出る。青空が無償に恋しくなる。雨でひえきった体にムチうち、再び川の中に入る。金作谷はもうすぐだ……。ところが時計を見てビックリ、もう5時をさしている。じかたがない、今日はこれまでだ。フライを張り、夕食とする。今夜はビーフスープとライス。「食事をする事は人間を豊かにする」（O氏）落ちついた。今日一日も終った。あと私に残されたことは寝ることのみ。（追伸）薬師岳の見える辺りで、3人パーティーに会う。彼らの一人はすさまじい格好をしている。ズボンは、裂け上着はボロボロ、おそらく激流に流されたのだろう、ふたことみこと言葉をかわし別れる。その他、川原に得体の知れない足跡（おそらくクマの足跡であろう）が散乱していた。

8月3日木曜日 天候（雨時々曇り） 停滞

昨夜、眠りについたのは8：30ぐらいだったと思う。9時頃、N氏の言葉で目がさめる。何か空が光っているとのこと。確かにテントが赤く光っている。私はてっきりN氏が懐中電燈でやらしているものだと思い、そのまま眠りこんでしまった。ところがそれからなんとなく目がさめると、ものすごい光にともない、雷が鳴りくるっているではないか。私は少々おそろしくなった。そのうえ雨がフライにたたきつける様に降り出して来た。メリメリメリガタンザーザー、こんなすさまじい雷雨は始めてである。N氏もO氏も目ざめているようだ。私はO氏に「P.M.11:00からの気象通報を聞こりか？」と問うと、O氏も不安なのか賛成する。気象通報によると「地球自転によりできた低気圧の為」であるとのこと。どうしようもないまま、再び寝ようとするが、川の増水の事やいろいろの事が頭にうかび、なかなか寝つかれない。しかしいつのまにか眠っていた。朝、目がさめて川の水量を見ると、だいぶ増水しているようだ。雨もふっているしこの増水だと徒渉もできないので停滞と決す。（今日、停滞することは、上の廊下を断念することになる）それから3人で地図とニラメッコしながらエスケープルートをさがす。話し合いのすえ、エスケープルートとして、現在地から赤牛沢の出合までもどり、赤牛沢をつめ、高天ヶ原新道に出るルートに決める。決め終ると3人ともまた寝入ってしまう。お腹がすいて目がさめると10時である。朝食をすませて天候を見まもる。合宿の事が気にかかる。昼すぎから雨もすこし小降りになる。川の水も少しづつ減ってきたようだ。あとは待つしかない。5時に夕食をとり8時に

寝る。「明日はきっと晴れてくれ。」

8月4日金曜日 天候(曇り時々晴れ時々雨)

昨夜10時頃だった。我々のビパークサイト裏の崖が崩れだした。昨日の昼から危険だと思っていた所である。闇の中で移動がはじまる。三人とも無言のまま一心にビパークサイトの移転に徹する。ビパークサイトの移動も終り、ひといき入れた所で眠りに入る。朝、目ざめて外を見る。曇っているが、川も水が少なくなり行動できそうである。早々に朝食(茶づけ、ヒモノ)をとり出発する。川の水が減ったとはいえ初日に比べると水量はいくぶん多い。徒渉がはじまる。一度目の徒渉はふとももまでであった。二度目の徒渉も無理はなかった。三度目の徒渉の時である。O氏が渡りきり、N氏が渡りだした。川の中程まで行った時である。N氏が激流に足をすくわれながされだした。N氏はズブヌレになりながら必死で対岸に渡り着いた。ホットした私は我に返った。私はまだ川をわたっていないではないか! N氏の必死の姿を目にして私は大変おそろしくなる。しかし、渡らねばならない。腹を決めて川の中にザブン……。私は押し流されそうになるのを必死にこらえ、かろうじて耐岸にわたりつく。その後の徒渉は問題なくすみ、いよいよ赤牛沢の登りになる。この沢はよくすべりそうなのでワラジをはくことにする。高天ヶ原新道をさがしながら登る。だが一時間たっても、高天ヶ原新道は現われない。しかたなくそのまま、赤牛沢をつめる。二時間、三時間と時間はすぎていく。少々不安になる。このままこの沢を遡行すると赤牛岳に出てしまう。「まあいいどうにかなるさ」なんて気持ちで登りつづける。また時間がすぎていく。もう1000mは登ったろう。そのうち霧がたちこめて、まわりの一切の物をかくしてしまった。そして霧がはれた時、我々は赤牛の稜線にてていたのである。周囲の山々を見ながら休憩をとる。黒部渓谷をはさみ向うに薬師岳の堂々たる山なみが見える。雪渓も見える。風がでてくる。帽子が飛ばされそうである。寒い! 我々は再び歩きだす。赤牛岳のピークをすぎると高山植物のさきみだれた道となる。高山植物というものは、なんと可愛らしいものだろう! 一つ一つ花の名を思い出しながら稜線を行く。そして岩影げをこえたとたん。我々の目に黒部湖の美しい姿が目にとびこんでくる。後立山連峰をバックに、ウグイス色の湖がなんともいえぬ情景だ。写真を取り、しばらく見とれる。この景色を我々だけで見るのがおしいような気がする。この美しい景色を頭にやきつけ、東沢出合までの長い長い下りにかかる。東沢出合着PM4:00夜、無事にぬけることができたのでコンバを行う。昨日うって変わって、空には、あふれんばかりの星がかかるやいでいる。

(847.8月1日~8月5日 記 古賀)

屏風岩・前穂周辺の登攀

9月20～24日

I野上(哲)、立岡

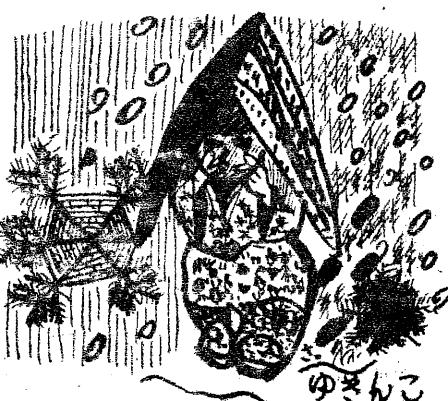
まだ夏の喧噪をくすぐらせてる都會を去り、山の中を歩いていると、自然はすっかり秋めいていることを知らされる思いだった。梓川の河面を這っていた朝もやも消え昇り、横尾へ至るから松林の小径はすがすがしい朝のプロムナードを盛り立ててくれる。しだいに進むにしたがってそぞり立つ明神の岩峰や、また私たちがめざす前穂東壁、四峰正面壁の岩壁が次々と碧空に展開されてゆき、そのつど私たちの登高欲が盛り上げられてゆくのがわかる。横尾の出合ももう真近くなり、屏風岩の一部も見えだしたころから私たちの足は幾分速さを増した。出合の小屋で小休止し屏風岩に向かう。横尾の岩小屋の少し上流を飛び石づたいに対岸に渡り、一ルンゼの押し出しとおぼしき所を登ってゆく。一ルンゼの岩小屋まで登ったがやっぱり水が無かったのでまた下まで水をくみに降りる。この岩小屋には不吉なジンクスがあるという。見ればそう陰気な感じはなく汚れててもいい。けれど誰が言い出した迷信か知らないが、これから登ろうとする者を動搖させるに充分力をそのジンクスはもっていた。私たちは一ルンゼから下部岩壁に取り付いた。正味2ピッチたらずの所だが、ザックが重すぎるのと、体が慣れていないのとでずい分時間をくった。東壁にはすでに取り付いているパーティーがいた。T4の小さなビパークサイトにツェルトを張り、一日の終りのひとときにくつろぐ。あお向けて寝ると黒い壁がおおいかぶさってくるようで気味が悪く、ベルメットをかぶって寝た。

上高地発—7：50、横尾—11：00 T4—4：05

9月22日 快晴。昨日の経験から相当荷の軽減をせねばならぬので、食糧も必要量だけにし、空の水筒一ヶ、ガスカートリッヂ一ヶをすて、トップ用、セカンド用でザックを分ける。6時30分雲稜ルート取り付き。野上トップでテラス右の明瞭な凹角に取付く。凹角内二つの小ハシグをペーパーで乗越し、40mでアンカーレッヂに立つ。さらに10mでピナクルのあるテラスに出る。テラスより垂壁を登り小ピナクルのテラス約20m、テラスより10m左上バンドをたどると扇岩テラスに出た。8時。岩も堅くクライミングは快適である。次のピッチにはまだ先行パーティーが居るためカステラをほおばりながら高見の見物。扇岩テラスからはスラブにストレートに打たれたボルトを35m直上し、ハング下のボサテラスでピレー。大ハングの一段目は左から、二段目は真正面を乘越しボルト連打のスラブを右上、35mで東壁ルンゼに入る。東壁ルンゼは傾斜はいくぶんゆるくなるが、全体がのっぺりしていてこなしつくい所が多い。3ピッチでバンドに達し、左のじめじめしたルンゼを30m登り、12時半終了点。北尾根の縦走を止め、涸沢に下る。屏風の頭—2時20分 涸沢—4時。

9月23日朝のうち晴

台風の影響でか午後よりガスが濃くなる。潤沢発5時50分。三・四のコル7時50分。コルに荷をデボレ、から身で四峰正面壁に向う。D沢の下降は浮石、落石の危険が多くきわめて悪かったとのと、概念把握が不充分だったため、取付まで2時間近くもかかってしまった。先行パーティにタッチの差で甲南ルートを先行されたので、北条新村ルートに取付くことにする。10時、北新ルートの核心部のハングもなんなく越え11時40分終了。四峰ピークより三・四のコルの下降でガスで方向を誤まり東南壁の方に降りかけ、あわてて引き返す。三・四のコル12時40分。私たちの計画もあと前穂東壁右岩稜を残すのみとなり、今日中に抜けてしまひ勝算のもとにファイトを燃していた。取付点13時30分、だが取付点下方50m、ちょうどB沢雪渓の上縁に怪我人がいることを発見。Dフェースと共に右岩稜からの落石がまとまに彼らの居る所に集中するため、登攀を中止し、できる範囲で救助活動に協力することにする。



秋 の 穂 高

植 原 清 明

10月8日

朝6時に新島々駅に着いたといふのに、飛び石連休のために大混雑、そのため上高地に着いたのは13時になってしまった。木村小屋に登山届を出し、すぐ西穂に向って出発する。展望のきかない樹林帯の中を、喘ぎながら登って行く。今日中に、独標まで行かなければと気は焦るが、あまりはかどらない。やがて樹林帯が切れ、西穂山荘に着いた。山荘前のベンチに腰をおろし、天気図を取る。天気図を取り終って再び出発。這い松の間を放心したように歩いて行く。北西に笠ヶ岳、南に霞沢岳、足下に大正池が見えるが、感激もしなければ感傷的にもならない。今アルプスへ来ているという実感さえ湧いてこない。夕闇が迫っているのに、独標は歩けば歩く程、遠のいて行くような感じだ。17時10分、独標まで行くのを諦め、這い松の中にテントを張る。辺りはいつの間にか闇にとざされていた。空には無数の星が輝やいている。今夜、ジャコビニ流星が見られるのに、明日は朝が早いため、夕食を済ましてすぐ寝る。13:00(上高地) —

15:50(西穂山荘) — 17:00(独標手前)

10月9日

4時30分。起床。朝食を簡単に済まし、テントを撤収して、5時30分出発。今日も快晴だ。這い松の斜面を登り切り、奥穂のジャンのような独標に攀じ登り、幾つかのピークを越えて西穂山頂に8時過ぎ着いた。奥穂は近く、間ノ岳は小さなコブに見え、1時間余りで行けるような感じがする。しかし、実際、ヤマ場はこれからである。西穂を後に、岩峰を上り下りしながら間ノ岳を目指す。さして困難ではないが、雪が付くといやらしそうだ。間ノ岳へは先行パーティーがいったので岩陰で待避する。間ノ岳の上りは困難だ。崩壊が激しく、落石に注意しながら慎重に登る。間ノ岳より天狗の頭を越え、やっと天狗のコルに着いた。鎖に導かれながらいつの間にかジャンダルムの下に出た。ジャンはさして困難なく登れる。馬ノ背は、ナイフリッジでおもしろい。馬ノ背を越えると奥穂は目の前である。奥穂山頂付近は人でわれんばかりだ。13時、やっと奥穂に着いた。今までの苦しさも忘れ、山頂からの景観にしばし酔いしれた。奥穂よりザイテンを下り、涸沢へ。5:30(独標手前) — 13:00(奥穂山頂) — 15:30(涸沢)

10月10日

今日もまた快晴だ。こんなに毎日快晴では申し訳けない気がする。今日はハイキング気分で北穂へ向う。北穂小屋のテラスで1時間余り、秋のアルプスバノラマを楽しんだ。

10月11日

朝から雨が降っている。7時に起き、のんびりと食事をして9時下山にかかる。秋雨にけむる紅葉の中を、とぶように上高地へ急ぐ。屏風岩には大きな滝がかかっていた。上高地で聞くところによると、北穂は雪だったそうだ。

新雪の南アルプス

(茶臼岳—赤石岳縦走) 野上② 堀野、岡村、三浦

11月1日 晴

国鉄金谷 (6:08) — (7:24) 千頭 (7:30) — (8:45) 井川一 (10:10)
— 畑薙第一ダム (10:20) — (11:00) ツリ橋 (11:30) — (12:00) ヤレヤ
レ峠 (12:10) — (13:15) ウソッコ沢小屋 — (14:25) — 横窪沢小屋

前夜、国鉄金谷駅に寝て、翌朝一番の電車で千頭に向う。千頭でおもちゃのような電車に乗りかえて井川に着く。これよりバスで畑薙第一ダムまで約1時間である。ダムの湖水を左に見ながら1時間位歩くとツリ橋に着く。以外に長いツリ橋で真中位になると、2枚の板が1枚とれているので、右方過重になってヒヤッとさせられる。1ピッチ・電光形に直登してちょっとした台地に出る。ヤレヤレ峠である。峠より上河内沢に下り、小さなツリ橋を4つ程渡って道は谷にそって登って行く。天気はいいし、紅葉した楓が美しいし、写真を撮りながらのんびり歩く。

上河内沢が2つに別れる手前に、新しくウソッコ沢小屋が建っていた。丸木で造られた美しい小屋である。谷のつめまで行って、ここより横窪沢乗越へ尾根を300m位登るのである。電光形につけられたきつい登りである。私は調子が悪く乗越の手前でみんなに先に行つもらつた。元気な若い人達がさっさと行った後は、静かな秋の道が続いている。かさこそと落ち葉を踏みしめながら、過ぎ去った日の事が色々思い出されてくる。母が倒れた日、彼女が自殺した時、妹がお嫁に行った時、父が死んだ夜……。登り切った所で沢の音が聞え、沢をへだてて向うに小屋が見える。少し下って横窪沢を渡ると小屋である。解放された小屋はすばらしい。広々と小屋を使って夕食の用意を急ぐ。

11月2日 晴

横窪沢小屋 (6:55) — (9:35) 茶臼小屋 (10:05) — (10:25) 茶臼岳の肩
(10:30) — (11:10) お花畑 (11:30) — (12:10) 上河内岳の肩 (13:00)
— (14:20) 聖平小屋。

5:30に全員起床、少し寒いが朝食の準備にとりかかる。

他のパーティーも朝食を終えて出発していった。我々のパーティーが、最後に小屋を出る。

今日は、最初から、きつい登りである。小屋を出て、3ピッチ目ぐらいの所に、水場がある、そのあたりより、雪が少し残っている。ようやく茶臼小屋に着いた。このあたりは、白一色と言つていいくらいに雪が積んでいる。ここで軽い昼食をとり、又登り出す。右手には、富士山を、見ながらのんびりとした山行である。

この様な山行を、年に何回か持つと、楽しいだろう。

いよいよ、今日の最後の登りにきた。上河内岳下のピークまでである。聖岳、赤石岳を、前に見ながらの登りも又楽しい。ようやく、ピークに着いた、ここで大休止とした。するとM君、スケッチャブックを取り出して、聖岳方面をスケッチし始めた。ここからは、聖平小屋までは、だらだらの下りである。聖平小屋の水場は、水量が少なく、少し汚れていた。

11月3日 記録 三浦

聖平小屋(6:25) - (9:15) 聖岳(9:30) - (11:30) 鬼岳避難小屋(12:45) - 鬼岳(13:00) - 中盛丸山(14:35) - 百間洞小屋(15:30)

4時15分全員起床、どうもすっきりしない空模様である。6時25分小屋を後に目的の山聖岳に向う。我々が今まで来た道を下山するパーティーもある。1ピッチ目からボツリと雨が顔にあたり、そろそろ雨天対策の準備にとりかかる。聖岳までは、ほとんど上りでたいへんなアルバイトである、途中にはするどく切れ込んだ所もある。天気は上に行くほどひどくなり、雨がミゾレとなりついには雪となってしまった。途中、2人の下山者に会う、ともに単独である。9時15分吹雪のよう中を3011mの頂に立つ、昨日までの好天とはうって変わって雪の聖にひどく感銘した。

どうもこのまま降り続くようなので、少し急ぎぎみに鬼岳の避難小屋に向かう。雪の深い所では30cm以上もある。途中ライチョウに会い緊張した心をなごませてくれる。冷えきった体にむちうって、まだか、まだかと歩き続け、昼前に避難小屋を見つける。わりとしっかりした小屋で骨組みは鉄骨である。中で火を焚き、紅茶をわかして腹ごしらえをして一腹する。あい変わらず雪と雨のミックスで、このまま歩く気がしない。

約1時間滞在して雪の中に入つて行く。鬼岳を越え、小鬼岳あたりでは、地面が凍つて行くよう感じの降りかたである。

中盛丸山に向かう途中、道を失ない少しあたりを歩く、本道にもどつて、最後のピークとばかりがぜんハッスル、2時35分にピークを踏む、体はビショヌレで、靴の中まで水びたしである。足速に分岐点に向かう。百間洞まであと1時間の道標がある、ひと安心である。このあたりでは

雪も雨になり小降りである、雨具を取り、あと1ピッチ小走りで百間洞の小屋につく。あまりバットしない小屋だが、一同よかったです、よかったです。すぐに火を焚いて濡れた物を乾かしていると、1パーティーが入って来る、こちらが先客であるので、よい寝場所を取っている。小屋の中に、つりさげテントを張り、乾燥室と称して濡れた物を入れ、中でコンロを焚く。外はまだ雨が降ったり、やんだりである。水割りのアルコールで疲れた身を癒す。P.M. 8時、明日の天気を期待して寝床する。

11月4日(土) 晴 記録 野上

起床(5:00) 一百間洞小屋(7:00) 一百間平(8:30) 赤石頂上(10:50) —
(11:20) 大聖寺平(12:25) — (16:10) 広河原小屋

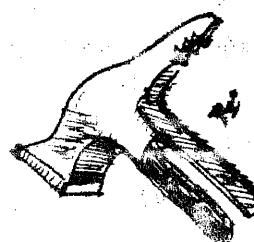
夜半の雨も朝には「ガス」とともに晴れ、小屋の周囲の樅の枝の雨露が、朝日にひかり、非常に気持ちの良い朝を迎えた。

昨日、ガスとみぞれの中を登った、聖岳を後に眺めながら百間平から赤石岳に向う、標高3120mの赤石の頂上はガスがかかり、なかなかその全貌を現わさなかったが、我々が頂上に登ったころには、すっかり晴れわたり遠く北アルプスまで展望がきいた。頂上附近は、さすがに雪は深く初冬の山を思わせる。2~3パーティーに出合ったが、南アは人が少なく気持ちが良い。小赤石から大聖寺平を経由して今日の宿泊地である広河原に下る途中(標高2300m附近)で野上が倒木の上で転倒して右足のヒザを痛め枝をたよりに下る。

11月5日(日) 快晴

起床(5:00) — 広河原小屋発(7:00) — 小渋温泉(13:00)

昨日、泊っていた他のパーティーが早く出発して静かになつた小屋をゆっくりと出る。今朝は又、空がつきぬけるような快晴であるが足が痛むために何とも情けない。小渋川の河原につけられた、ルートを下り、キタ沢出合を過ぎると正規のルートは左峠を高巻きしている。しかし、我々は時間短縮のために徒歩を覚悟で河原に行く。早速、冷たい徒歩が始まり小渋温泉まで数十回の徒歩を強いられた。その間、新雪をいたいたいた赤石岳と小渋川の紅葉が極めて印象的であった。小渋温泉からは、大豊建設の現場事務所からタクシーを呼んでもらい、その日のうちに帰郷できた。



木曾駒ヶ岳

参 加 者 岸 本 梅 原 金 田 数 野 立 岡

5月4日 二合目小屋 玉ノ窪小屋

5日 玉ノ窪小屋 木曾駒ヶ岳頂上往復 上松下山

開田 - 野麦峠山行

4/28~5/1 野上(博) 堀野 前野 篠本

4月29日 晴

大阪からの夜行で、早朝木曾福島に着く。木曾川の流れと、宿場町の風情が旅愁にさそう。ホームに下り立つと、まだ薄靄がかかっていた。はく息は白く、やはり山里の冬は長い。駅の待合室で、スチームを囲み暖を取った後、地蔵峠に向って出発する。地蔵峠から見ると、前方左よりに、雄大な御岳が雪をたたえてどっしりと横をわっている。御岳との最初の出合いだ。これから先、幾度となくその大きな姿を見たが再び同じ姿に出会ったことはなかった。地蔵峠から杷ノ沢を経て西野までは、ハイキングコースがつけられていた。旧街道と思われる。部落から部落へと山を越えて、道が続いている。道のわきの名も知らぬ小さな花や、こぶしの白い花が、見知らぬ人を迎えてくれる。小川の透明で冷たい水や、うぐいすの鳴き声にも春を感じられる。かわいらしい新芽をつけた唐松の林は、遠くから見るとかすんで見え、うららかだ。素朴な村の人達の生活は、なにか忘れていた心を呼びさまでしてくれるような気がする。1つ、2つと山を越え、11:00近く西野部落に着いた。今日はここで宿を取ることにしている。旅館に入って間もなく、急に空模様が変り、雨が春雷を伴ってすさまじい勢いで降って来た。しかし雨はすぐに上り太陽が再び暖かく照らし始めた。そこで開田村を散策しようと、雨上りの道を出かけた。人家から遠ざかるにつれ、山里から高原の景色に移って行く。人にはめったに会わない。時々畑仕事のおばさんや、荷をかつついだ牛に会うだけだ。広々とした高原には、放牧が行なわれていて、サイロや牛舎が点在し、のどかな春の夕暮れだった。そろそろ日も西に傾いたので宿にかえり、眠りについた。

木曾福島 (4:58) → 地蔵峠 (6:00) → 杷ノ沢 (9:25) → 西野峠 (10:25) →
西野部落 (11:00)

4月30日 晴

8：00 西野部落出発。旅館のおばさんから、今が水芭蕉の見処だからと聞き、胸をふくらませて藤沢部落へ向う。湿原地の雪の間から、小さな首をボッと出して咲いている。群生とまでは行かないが、少しづつかたまって咲いているのは可憐だ。部落をすぎて沢をつめて行くと道がなくなってしまった。地図をにらみながら谷をつめ、かろうじて残っている道をみつけ、藤沢峠に着いた。峠を越えるとまた道を失いかけたが、無事旧道をみつけ、名もない峠に出た。この辺りの道はほとんど廃道に近く、部落の人達も通っていないようだ。この峠は正反対の方向に同時に御岳と乗鞍岳を望める地点だった。そこで日和田峠と名づけ、昼食を食べながら、2つの山にみとれた。足下の谷には小日和田村が見えている。御岳を見たのはこれが最後だった。小日和田から日和田へぬけ、七曲りを経て野麦へ出る予定だったが、村の人達の言葉から七曲りを断念し、日和田から県道を歩くことにした。旧木曾街道であるが、舗装されてきれいな道路になっている。土の臭いのする山道から、コンクリートの道路へ出た時は、情けない気持だった。山すそをまいて道がついているので、時間はたっても、いっこうに目的地に着かない。やっとのことで阿多野一野麦分岐点に着いた時は、もう4時。車のマーケットが止まっていたので、食料を買い求め、少し元気を回復し、野麦まで頑張って歩く。足が非常に痛い。民宿に泊まり疲れをいやす。

西野（8：00）→藤沢峠（11：07）→（12：00）日和田峠（12：30）→小日和田（1：25）→日和田（1：45）→高山一野麦分岐点→（3：50）阿多野分岐点（4：15）→野麦（5：45）

5月1日 晴

野麦から野麦峠へは整備されたハイキングコースがあり、地蔵峠までは1時間半で着く。ここは乗鞍展望にはすばらしく良い所だ。乗鞍が、眼前に大きく見える。青い空と、白い山と、緑の山々……。喜びいさんで写真を取る。野麦峠への途中には、牧場やキャンプ場があり、夏になると若い人達でにぎわうだろう。ここまで登ってくると、雪がまだチラホラ残っている。野麦峠には復元されたお助け小屋があり、昔の峠の想影を残している。女工哀史を思い出し、やりきれない気持ちになる。これほどすばらしい展望の地に、幾多の命が消えていった事を思うと悲しい。

旧道を下り川浦へ出る。これが最後の行程だ。やぶ原までトラックに乗せてもらう。途中一瞬ではあるが、はるかな向うに穗高岳を見た。

野麦（8：25）→（8：50）地蔵堂（10：30）→（11：00）野麦峠（12：00）→川浦（1：35）→やぶ原（3：20）

保墨岩 R・C・T 2月10・11日

2月10日(土)

阪急六甲20:00集合。あちら、こちらで雪も積っている為か、やはり参加者が少なかった。雪の山に自ずから入山するのは誠に喜ばしいことですし、又大切な事です。二人といふ淋しい保墨岩にてテントを張る。夜中、二人現われる。色々な話をして愉しかった。翌朝、岸本氏が来るまでぐっすりと寝る。小雪がちらちらし、何か保墨の岩が穂高の岩場を想像させるムードで素晴らしいだった。午後、大先輩の新川氏が現われ、いろいろなお話を聞きました。5時から人工スキー場にてツバ一への準備運動を行なう。やはり我々は山家である以上、スキーというものはあまり上達出来ないのであろうか?

参 加 者

内藤2 新川 岸本 野上(芳) 野上(哲) 古賀 植原

氷の山・スキーツアー

(2月18日・東尾根から戸倉へ)

内藤久嗣

2月17日夜、宝塚

宝塚駅に集合したメンバーは、堀野、乾、釜本、内藤(保)、内藤(久)の5名で、雨が降っていたせいか、集りが悪い。福知山で乗り換えて、八鹿駅に1時55分着。最終のバスで草出まで入る。向山スキー場まで登って、小屋で仮眠をとる。雨が強く降り出して、山行への心をぶらせた。8時に出発。向山の稜線は、ガスっていて、小雨である。雪質も非常に悪く、しかも積雪が少ない。スキーを履いて、先を急いで、一の谷の出合まで休憩は2回、頂上へは1時05分到着。視界悪く、約20mくらい。幸いなことに、風はなく、寒さもゆるい。二の丸への下降、取付点が見つからず、てこづった。雪が少ないので感じが違っていたこと。天候の良い時に、何も考えずに行っていたことが、このような天候の悪い時、方向を見失うことにつながっている。

何とか、この経験で少し地理を覚え直した。こうなると、スキー技術なんて、小手先のこと、体力と決断力のみだ。

二の丸の雪原でも同じ感じだったが、磁石と地図で測定、方向を指示し、ガスの中を直下降。ピッタリ坂の谷への入口に入り込む。

さすが、と一同は感激する。坂の谷が旧国道29号線に出たのは、もう日も落ちた5時20分だった。ツァーの楽しさと、ツァーの恐ろしさを再確認する。

(後の話で、新川利夫氏が戸倉から二の丸まで1人でやってこられた。連絡の不確実さからきたので誠に申し訳なく思っています。)

貫井左俣遡行

立岡、宮本、三浦

三条発梅の木行のバスで2時間、終点に着いた時は昨夜の睡眠不足のためか気分が少し悪い。しかし、ここはもう都会の雑路とは違いのどかな春の山河風景である。早々に我等9人国道沿いに歩き出す。まず築山谷グループ3人と別れ、貫井橋で八幡谷組と別れて我々3人だけになる。バスで降りた者は全員貫井谷が目的である。

橋を右に折れて山の中に足をふみ込むとすぐに堰堤があり、そこを越えたところで身仕たくをし、腹ごしらえをする。9時30分我々は末端から取りつき、少し上流で身仕たくをしているパーティーを全員追越して先を急ぐ。5m前後の滝と堰堤を越え30分ぐらい進むと二俣である。ここで右の方に赤い印がしてあるが、左であることに確信を持って進む。(右俣に行くと上半は1時間ぐらいのヤブコギのこと)

5m前後の滝を越えて進むとスラブ状の三段のトロが見える。高巻きをしてはおもしろくないので、全身びしょぬれになりながら滝身の中を登る。それからなおも10m前後のトロ状の滝を越え、二俣を左に取り進み険陥を滝を登る。最初は右側をへつり、チムニー式にささせて一段目を越えると次は10mぐらいの滝を右から左にトラバースする。ここでもう下着までびしょぬれである。40mぐらいのナメを過ぎ、明るい所で昼食をする。

12時である。火を焚いて濡れた体を乾す。体が乾き腹も張って来ると歩き出すのが億劫になるが、目の前に7mの滝が見えているので早々に取付く。ここも滝身を登る。すぐにも全身びしょ濡れで、核心部に入る。20mの滝が見える。圧巻である。左の水量の少ない岩を登り、上部に出るとハーケンが2本目につく。2~3滝を越えると、また20mほどの滝に出る。難なく越えると、また上部に残置ハーケンが目につく。ここで昨夜から来ている先行パーティーを見つける。どういう訳かザイルを使って高巻きをしている。我々はそのまま沢を進みガレ場に出る。もうこの谷も終りに近い。大きく左に折れすぐに10mぐらいのチムニー状の滝を越え、つづいて15mほどのスラブ状のトロを越える。上部オーバハンジングを腕力で強引に越える。

沢は小さくなり、大きな滝もなくなり、二俣も多くなる。左へ左へとルートを取り。満開のシャクナゲを目の前に遡行の疲れを癒す。15分ぐらいのヤブコギで1時半、武奈が岳に出る。築木谷グループと合流し、のどかな春のそよ風の中で八幡谷グループを待つ。

3時下山にかかり北比良峠を越えて大山口に出、地下袋とわらじをとる。

(記 三 浦)

比良山 八幡谷

籠本 維都子

5月19日

阪急十三駅に9:00 P.M. 集合。9:34発の特急で四条河原町に向う。今よいの寝場所をさがして夜の京都をさまよい歩く。10:30 P.M. 三条京阪の橋の下に到着。目前には鴨川がとうとうと流れ、対岸の明りが目にしみる。五月の風は夜になるとやはり冷たく、ぼんやり橋を見上げていると、さびしい気持ちになってくる。昔の人達もこんな風にして寝たのかも知れない。河原乞食みたいだ。明日の山行を思うと、初めてのわらじのつけた沢登りだけに、不安は大きいが期待の方がより一層大きい。どんな所だろう。どういう風に歩けばいいのだろうと考えてみても、行ってみなくてはわからない。“行ってみれば”そして“行こう”といつも思う。わらじの点検をし、あんまり寒いのでウイスキーをぐっとあおって寝た。

5月20日

早朝から寒さのために寝ていられなかった。ウイスキーは朝までは持たない。京阪三条のバス停から、梅ノ木行きのバスに乗る。バス停は比良山系への登山客であふれんばかり。同じような姿の人達ばかりなので、ちょっと目を離すと見失いそうだ。臨時のバスが1台出たが、それでもバスは満員で、梅ノ木についた時はダウン寸前。3パーティーに分れて、貫井谷・サンマイ谷・八幡谷へ出発した。私は八幡谷だ。沢に入ってすぐにわらじをはいた。地下たびのかわりに白たびをはいていたので、おへんろさんみたいだと言われた。ほんまに変な格好や。なかなかわらじの感じがつかめない。かえってよけいにすべるような気がした。登り始めて10分もしないうちに、ボブンと川の中に落ちこんでしまった。首から下はズブヌレ。すべったり、ころんだり、傷だらけで必死について行った。12時近く二俣に到着。これから先は小さいが滝がいくつかあった。増え困難になって来た。すべてスタンスやホールドがとれない。アッと思った時はもう遅い。滝からすべり落ちてしまった。釜本さんが何か叫んだ。次の瞬間、滝の真中で落ちるのが止った。足はガクガク、血の気が引いてしまった。あまり高くはないけれど、下まで

落ちたらいなかつただろうと思う。それからは慎重に行動して登って行った。だんだんおもしろくなってくる。軽業師のようにバランスを取りながら、ヒョイヒョイと渡って行くのは楽しい。やっと慣れた頃にはもう谷も終りに近い。谷をつめてしまうと武奈岳の稜線へ出た。視界のきかなへ谷から、広々とした展望の稜線へ出た時はホッとした気持ちだ。琵琶湖が足下に広がり、山の車りもおだやかだ。太陽も明るく、若葉が美しい。他のパーティーはもうとっくに着ているはずだ。待ちくたびれて草の中で寝ていた。写真を取って下山する。北比良峠を下り、八雲原へ出た。ここには、チラホラ黄色いテントがはられていた。大山口まで一気に駆け下りた。大山口ではバスと入れ違になってしまったので、南比良まで歩き、バスで大津へ出た。

小豆島梅岳登攀

6月2日～3日

参加者：立岡、三浦、宮本、南、萩本、計5名

神戸22：10分発高松行きのフェリーに乗り、AM3：00坂手に着き、ほろ酔い気分で釣客に交って降りる。10分遅れの船が来るものと思い待っていると、季節便でシーズン中だけ毎航とのこと、我々の乗った船が最終であった。タクシーもなくしかたなしに港に寝ることにする。

6時に起き、坂手6：25発の始発のバスに乗り7：45分橋に着く。バスを降りると梅岳のばらしい姿が目に入る。針峰！……。朝日に照らされた岩は金色に輝き、我々の登高欲をいやうえにも高めてくれる。取り付きで食事を済まし8：20早々に岩に取り付く。僕とMは中央へ、T、M、Hは一般ルートへと分かれる。1ピッチ目、中央稜の取り付きよりやや左から取り付き5mぐらいのところでルートが違うことに気づき、そのまま右へトラバース、極度のバランスを要求されて正規のルートへと戻る。右上に延びるクラックをバランスで越え、足下にあるビレイを取る。続くMは岩になれていないためか、アブミを鳴らしながらやって来る。

2ピッチ目、一般ルートを辿りボルトが一本打ってある大きなフェースを越え、Tがビレーを引いているそばを通り、左へ大きくトラバースしながら30cmぐらいのテラスで切る。

3ピッチ目、左へ3mぐらい入りそこから真直ぐ延びたクラックを、残置ハーケンをたよりに上、凹角の中に入り、上部木が食出している所を苦労して越えテラスに出る。左にルートを取1mぐらい行ったとき“ガサー”という音とともに右手に持っていたハーケンが抜けた。スタッフは爪先だけという状態である。左手でなんとか体を持堪え、苦労の末もとのテラスに戻る。

ここから右にルートを取り7mぐらいで上部の木のあるところに出る。4ピッチ目、Mとトップを代わり2.0mほどザイルをのばす、どこでもルートが取れるかんたんな所を越えそのまま僕がトップでのぼる。5ピッチ目、取り付きから、かぶり気味の壁を腕力で越え左にトラバースしてから、残置ハーケンをたよりにバランスでピークに立つ。Mを迎えて、6月の瀬戸内海のすばらしい景色をながめながら、T、M、Hのグループを待つ、11:00であった。

(記 三 浦)

石切場・確保練習

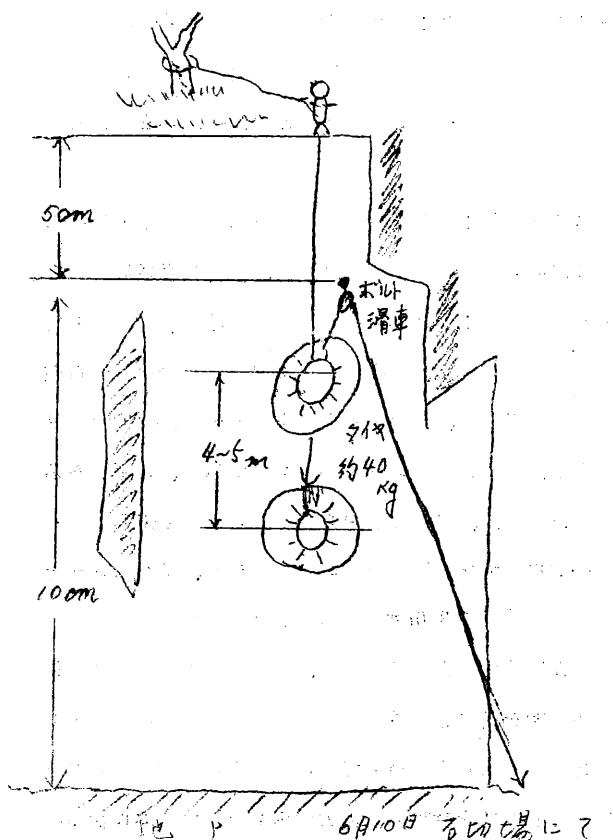
6月9~10日

参加者：L野上（哲）、内藤（正）、立岡、三浦、古賀、原、宮本、川島、
南、萩本、岸本、堀野

計12名

- 下から10mの位置にボルトを打ち、滑車をセットし、約40kgの大型タイヤの引き上げ用

とする。



- 上部テラスで、順次セカンド確保の要領で練習を始める。

○立っての肩がらみ確保では、最初9人中5人が失敗した。理由としては基本的な確保態勢の不確実な点、ランニング・ビレーの不充分から、体を引きづり込まれる等が考えられる。

- 座った姿勢における腰確保の安全性は高かった。

○グリップビレーではピンの信頼度、ザイルの耐久力が問題となり、適切なランニングビレーが必要である。

- 一人当たり4回～5回練習を行ない、確保の重要性を十分認識

した。

確保練習で十分な効果を得て、この後、全員で保墨岩に集う。

(記 立 岡)

氷ノ山から扇ノ山スキー縦走

3月1日～4日 L・釜本、立岡

4年前の2月、K.A.Cの先輩に連れてこのスキー縦走に挑んだことがあった。その時は悪天候、豪雪に行手を阻まれ、4日目にして小陣鉢山附近より尾根を間違え、小代側へ降りてしまった。縦走に失敗したとはいえ、但馬のもつ冬の厳しい表情に接し、まだ新人であった僕は自分なりの充実感のあったことを今も覚えている。

3月1日 小雪のち風強まる

弱い冬型の気圧配置で兵庫南部は晴れていたのに、北上するにしたがって雲行きが怪しくなってくる。案の定、丹戸では雪になった。午後2時、湿っぽい雪の中を東尾根に向う。足取りの重々私たちを白い闇の中に誘い込もうとするのか、それとも拒もうとするのか霧の切れ間の流れ尾根が白い斜面をひらひらさせる。稜線に出る手前、急な斜面の下からスキーをつけて登る。5時15分、トンガリ帽子の東尾根避難小屋にもぐり込む。スキーの締め具の調子が悪く、いろいろ改良を加える。

3月2日 雪

朝を迎えて風はいくぶん弱まったものの、あまりよい天気とは言えない。6時30分、夜明け待って出発する。例年に比して積雪が少なく、ブッシュが出ていて狭く急な所ではひと苦労だ。林帶では重いラッセルにひと汗流し、9時30分、氷ノ山頂上に立つ。濃いガスの為、氷ノ山越えへの下降ルートがわかりにくく、避難小屋で一服する。いっこうにガスの引く気配がないので、10時15分、シールを脱して、滑り出す。頂上より北にのびる尾根を少し下り、左にトラバースして県境尾根の側面をコシキ岩の下に滑り降りるのだが、北にのびるなだらかな尾根を下すぎ、少し登り返してトラバースする。視界のきかない場合は、むしろ頂上から県境尾根の側面を斜滑降する方が確実かもしれない。コシキ岩を巻くあたりは傾斜もあり、クラストした上に雪がのっていて気持ちが悪い。氷ノ山越えのコルまではブッシュだらけのヤセ尾根で、七転八倒する。小さなこぶを2つ越えて、導標28番の氷ノ山越えに滑り込む。（“但馬をめぐる山々”）

てよ27番になっているが) 11時15分。コルより呑米側へ50m程下り、教科書通り岩壁の下部のトラバースにかかるが、とにかくひどいブッシュで、もがけば、もがく程にアクロバットを演じ、消耗のわりにはかどらず、眼下の呑米へのやわらかなスロープに舌打ちする。たかが300m程のトラバースに2時間を費やした。最後にはスキーをかついで這い登らねばならなかつた。桑が峠への下降もちょっと複雑な所で、視界が悪ければ間違ひ易いだろう。桑が峠、2時30分。氷ノ山越えから桑が峠へのルートとして、コルから赤倉の頭を直登して、ヤセ尾根をワカンで下るか。もしくはコルより呑米あたりまで滑り下り、桑が峠まで林道を登る方法も考えられる。岩壁下部のトラバースは、雪不足なら猛烈なブッシュに悩まされるし、雪が多ければ雪崩の危険大である。桑が峠よりジグザグで1060mのピークに登る。稜線に出てもあい変らずブッシュに悩まされ、目の前の1100mピークの茶色の山肌を見るに、スキー登行の限界を感じる。呑米側をちょうど陣鉢山の腹あたりまで延びている林道を辿ることにする。1100mピークの西側、1000m付近で林道終点。5時50分設営。無風状態でひと晩中しんしんと雪が降り続く。

3月8日 雪のち地吹雪

7時45分出発。林道終点より1100mピークと小陣鉢山とのコルに急斜面を突き上げる。コルより少し登った台地に設営跡を見つけ、先行パーティーのあることを知らされる。小陣鉢への登りは地図で見るよりはるかに急登で、ブッシュもはげしいのでスキーを脱ぐ。ヤセ尾根を通過するまでスキーは着けられない。小陣鉢の次のピークは、左とそして少し登りきって右に大きな尾根がのびており複雑だ。県境尾根は登り切って直角近く左にまがらねばならない。前回の時、ゆるやかで広いこの尾根を間違つて降りてしまつたらしい。“おかしいぞ”と言って振り返つたあの時の、吹雪の中にかすむモンスターのような樹氷の景色が、僕の記憶を甦らせる。ブッシュだらけの急なヤセ尾根をいかにして滑り降りるか、これが重大問題である。そこでは斜滑降、キックターンといふ山スキーのセオリーが通用しないから困る。キンタマ制動とか申す高等技術を編み出したいたいしえの岳人の知恵に頭のさがる思いがした。悪谷の頭12時着。悪谷の頭より三ツ谷の頭の登りまでたいした上下もなく快調にとばす。雪は幾分小降りとなるが、北西風が強烈になり地吹雪。県境の切り開きはかん木が成長していて、あてにはならないが、鳥取県側はブナの大木が残されているのでルートの目安となる。はるか西方には広畠野の雪原が眺められて美しい。4時、細長い頂上の青が丸着。三ツ谷頭、青が丸付近は雪庇の発達が著しい。折よくガスが晴れ、懸念されていた、中ノ丸から但馬ローソへのわかりにくい地形を地図と照らし合せて見ることが出来た。ローソのブナ林は細長く伐採されていて、以前よりルートはとり易くなっている。肩ノ山はもう真近い。頂上より東に、急な樹林帯を滑り降り、中ノ丸のコルにつく。杉の木の二

本ある仏ノ尾との分岐のピークでちからつきて行動を打ち切る。5時。つかの間の夕日が顔を出し、疲れきった私たちの体を気持ちよく包んでくれる。やがて夕日も落ち、外は星明りのタンネバウム。腹を満していじけた手足を伸ばす、これ以上の満足が他にあろうか、だが僕らは不満の種をひとつもっていた。というのはアルコール類が一滴も無いということだった。並段あまり飲まない僕がそう言うのだから、Kの口惜しそうな顔ったらありゃしない。

3月4日 快晴のち夕方雨

食料、燃料とも過不足なく使いはたし、残るは行動食のピスケット一本となる。荷を軽くしようと調子にのって電池まで放ってしまい、後で後悔する。今日はみんなに会えるので気も軽へ。8時出発。但馬ローンは問題なく通過し、シブキ山のピークで先行パーティーの竜大W.Vの8人を追い抜く。シブキ山に描いたチョッカリのシュプールが私達の優越感をほしいままにしてくれる。スキー技術は稚拙だが、但馬においてスキーの偉力は遺憾なく発揮された。樹氷のきらめくブナ林、風が通りすぎるたびにカラカラと氷片が青空に舞い、私たちをこよなきメルヘンの世界に誘いこむ。扇ノ山の頂上はもう目の前だった。

10時20分頂上。シールを脱し、たっぷりワックスぬって、さあシーハイル！

11時10分頂上発。小ジッコの小屋12時30分。青下より入山していた岸本氏ら4名と合流、鳥越コースを下る。了

記、立岡

ある遭難のこと

立岡 さちお

三・四のコルで次の登攀の英気を養うため少しばかりパンを頬張り、ガスのたちこめた沢を下降してゆく。時たまガスが切れて岩壁が意外な近さでせまつてくるような感じや、白い闇の中に鉛の火花を散してゆくような落石の音が、高ぶりかけた僕の心の中に響くようだ。僕らは実際に危険な沢を後にし、右岩稜取付へのトラバースにかかった。取付の少し手前で、ふいに下方から呼ぶ声にさえぎられて立止る。50m程下の雪渓の上端に2人の男が立っており、怪我人がそこに寝ている。落石の危険があるので登攀を中止してほしいとひとりが叫んだ。僕は彼の言っていることはわかったが、なぜこの最後の登攀がその一声で没されてしまわなければならないのかしばらく腑に落ちなかつた。Nが様子を見に降りてゆく。僕はアメ玉をしゃぶりながららめしそうに、岩壁と下の三人を交互に見ながら下のNに様子を聞く。ひとつのものを囲むような形で居る下の三人の所に僕も降りてゆき、怪我人がただならぬ容態であることに気づいた。パート

のひとりが、僕らの登攀が中止されたことを詫びたが、この場におよんでそんなことはどうでもよいことであった。もうひとりの男は連絡に下山した男と通信を試みていた。混信と雑音のため岩壁中に響き渡るような大声で幾度も同じことを繰り返し叫けんでいた。とにかく伝言は徳沢に入り、警察から彼らの山岳会に、そして家族の人らに伝えられたにちがいない。怪我人をより早く救助するにはヘリコプターしかなかった。ヘリの手配を依頼し、次の交信は4時ということで交信は終った。彼、怪我人は落石の危険から守られるようにシェルンドのくぼみに身を横たえていた。かたわらに砕けて血に染まり、頭髪のこびりついたヘルメットがころがっていた。頭を強打しているので動かすわけにもいかず、かといって何の治療をほどこす術も我々にはなかった。ただヘリがこの沢の上空に舞い降りて来てくれる事を願うより方法がなかった。僕らふたりも、こうなっては救助にできるかぎりの協力をおしまない由を申し出る。

数時間前まで元気だったろう彼が、今こうして息も絶えだえにあえぎ苦しんでいるという痛々しい現実の光景が僕の胸を締めつけた。彼は今、必死に生きようと最後の力を振りしほり、唯、生への執念にすがりつくように生と死の迫間をさまよっている。彼がこうなったのは、ただ運命だったのだろうか、同じところを登ろうとして、何故、彼がその墓石程もあろう浮石をつかんで落ちなければならなかつたのだろう。僕らが先に取り付いていたら、もしかしたら僕のこの手がその浮石にだまされていたかもしれない。決して他人ごとではないこの現実。せいいっぱいの隣みの念とともに、僕らがやっている“遊び”がいかに危険なことであるか、胸の中に鐘が鳴り響くごとく恐怖が走り回るのを覚えた。

頭を裂かれた彼はそれこそ最後まで生きようとする力を振りしほってがんばっていた。彼の苦しみが、成すすべのない僕らの胸に痛く感じられてならなかつた。しばらくして彼の様子が静かになり、呼吸がだいに遠くなつていくのがわかつた。彼は友の呼ぶ声にもむなしく、かといって彼の死を信じる心の準備は誰にもなかつた。呼吸停止、脈搏不明、瞳孔反応もナシ。とうとう彼は逝ってしまったのだ。死亡確認3時。

4時、徳沢に下った人と交信再開。地形的にヘリの飛来は無理であるという応答。死亡を確認したという報告、救助隊の編成等。最終的に今日の我々の行動について4時45分再度交信。救助活動の打ち合せのため一名下山、一名は奥又白池に残留後、明日救助隊と合流。僕らは今日いっしょに下山することにする。一方、岩だなにハーケン陣をしきザイルで遭体を固定、ショルトを被せ、荒天、落石、流水にそなえて万全の処置をとる。5時10分荒天のきざしかガスが深く夕闇も加え、下降はきわめて悪くなつた。まるで底のない深井戸を降りてゆくような感じだ。6時35分奥又白池。一名残留。池からはずっかり暗闇になつた急な尾根道を、何度もつまづきな

がらころげ落ちるようになっていった。いつしか月が出ていた。8時30分徳沢園着。彼らの山岳会、家族とも連絡がついていることがわかり、又明朝救助隊が出発できるとのことであった。

9月24日

救助活動もどうやら順調に行きそなうので、彼と別れて徳沢を後にした。

彼の死は僕の存在すらむなしものにさせてしまった。山登りといふ「遊び」を至上の行為として、僕を今までさえてきたものがくずれしていくようではなあった。それでも登るのだ、と言いかれる何ものも見当たりはしなかった。自分の行為を肯定するためには原点から考え直さねばならなかった。ただ好きだから登るというのではあまりにもその代償は大きすぎはしないか、生命の冒読者になりさがってはいはしまいか！？

冥福を祈る

了 (立岡 記)



48年度総会報告 4月3日

○会則変更

第七条（会員制度）

名誉会員 7名

木村 寅次郎、前田 浩、片山 英一、島田 文雄、川本 勉、三宅 康市

新川 利夫、 敬称略

会友制度

○運用の仕方を誤ることなく委員会の慎重な審議が必要。

○会友から名誉会員にはなれない。

○その資格は K.A.C 在籍年数にかかわりない。

第十三条（会費）

○本年度より会費月額 350 円本会計一本にしする。

○従来の遺対積立金 50 円は廃止。

一、正会員推せん

原 和夫、 植原清明、三浦靖男、古賀英夫 以上 4名。

一、新年度役員

委員長 野上 芳宏

副委員長 岸本 光弘

運営委員会

企画 釜本、内藤（正）、乾、立岡、三浦

庶務 武田、釜本

会計 武田、釜本

装備 内藤（正）

月報 乾

リーダー会

I 野上（博）、乾、梅原、武田、釜本、内藤（正）

岳連役員

理事 岸本

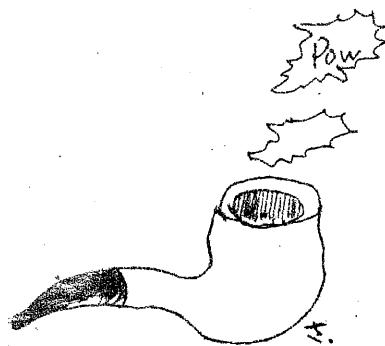
評議員 梅原、武田

分科会委員

技 術 内藤(正)
遭 対 篠 本
海 外 土 居、立 岡
山の集い 武 田

47年度 例会活動 例会総数41回

R.C.T 18回
ボッカ 10回
沢登り 4回
読図 1回
踏査 2回
スキー 2回
強歩 3回
家族パーティ 1回



会員動静・雑報

- 今年の新入会員の方は、本維都子さん。武庫川女子大学薬学部4回生の人が入会しておられます。以下萩本さんの文章から。

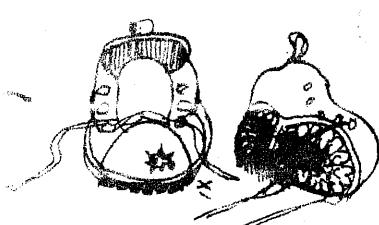
48年度の新人は今の所、私1人なのでさびしい気持ちです。荒くれ男達の中に混ってやつて行けるのかなと、ちょっぴり心配ですが、山への憧れは同じだと思い、必死で頑張っています。神戸山岳会には、長い伝統を持ち、コーチ陣がしっかりしておられるとお聞きして入会しました。先輩の話を聞いてみると、すごいなあ、いつかは登ってみたいなあと期待に胸をふくらませています。自分にとっての山がどういうものか、まだよくわかりません。ただ登りたいだけの未熟な私ですが、アルピニストとしての自覚だけは失わずに、せんいっぽいついで行きたいと思っています。

- 先代の小崎無一さんに代わって、今回から月報の編集を受け持つようになりました。今号は、1年分の原稿の編集だけということにしましたので、会員動静は休ませてもらいます。
- 次号に今号の会員動静を載せますので、御諒承下さい。（編集室より）

○原稿投稿の要領

月報を編集する場合に、みなさんから集められた原稿は、縦書き横書き、厚数の違った原稿用紙が送られてくるので編集のさいにたいへん手がかかります。そのため会で原稿用紙を買い、統一することにいたしますので原稿を書かれる方は、その用紙か、それに相当する用紙をお使い下さい。

この件に関しては次号で詳しく説明致します。（編集室より）



編 集 後 記

先頃、輸入タバコが円切り上げのために安くなり、パイプ党にとっては嬉しいしたいです。
しかし吸いすぎにはご注意を。

1970以来、月報の発行が止絶えていましたが、1年ぶりに発行することができました。僕は
初めて月報編集を受け持ったので、なかなか思うように編集できませんでしたが、先代の、
小崎無一さんにもまけずに、より内味の濃い月報をこれからも作って行きたいと思います。
みなさんのご協力も期待します。 (ヤーポー)

あ
山登りという行為自体において日常が超越されようとする刹那、"僕は在る"という醒めた
実感が僕の脳裏を走り去る。そいつは、すべてを包みこむ永遠の在ることをかすかにほのめか
して、僕をひとり残して走り去る。そんな刹那が恋しくて、また山に行きたくなる。それは何
でもない錯覚だったのかもしれない。けれど、ちょっと気になって書きとめて見たくなる時が
ある。そんなメモでもあれば寄せてください。 (立チャン)